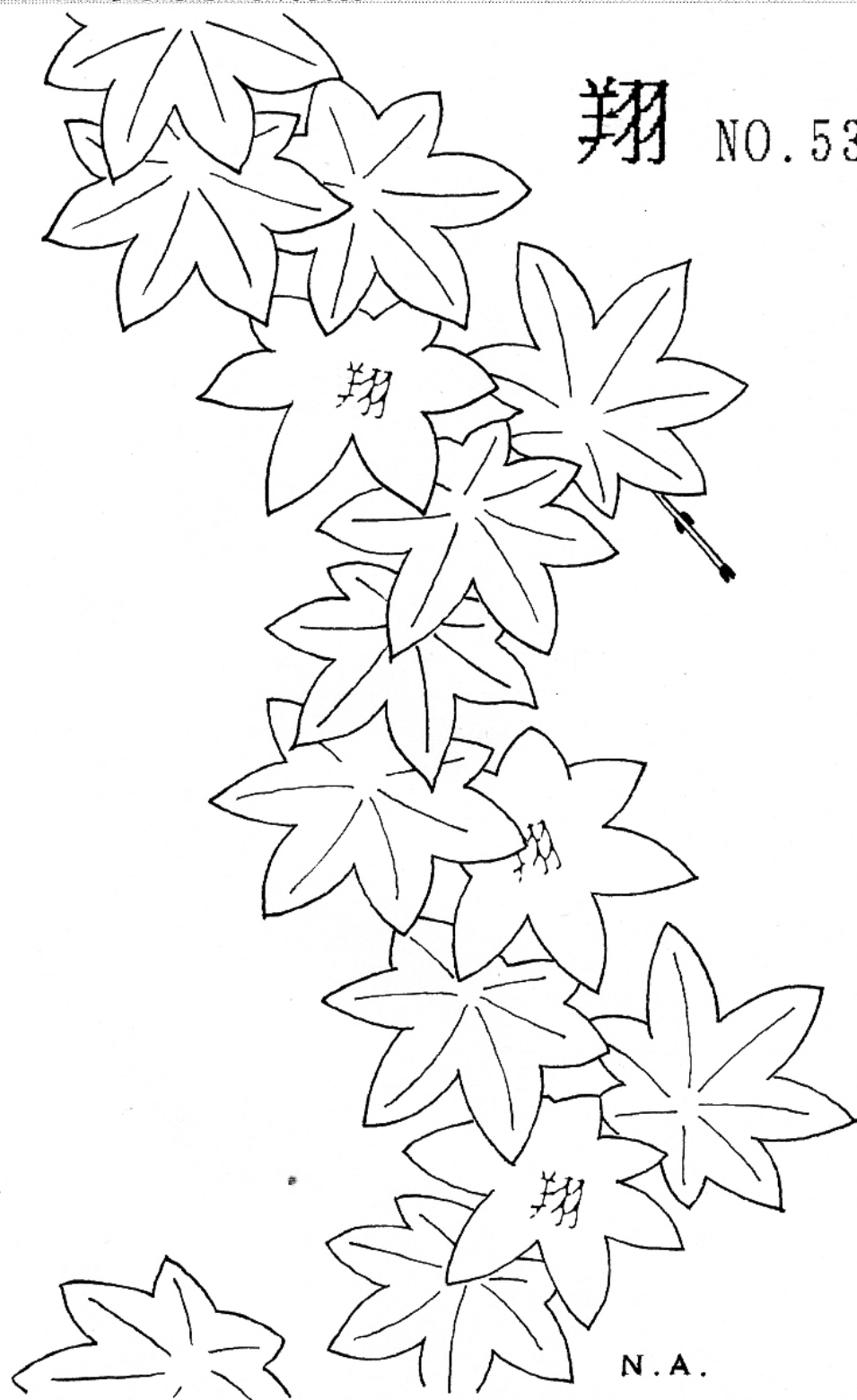


1985 October

翔 NO.53



目 次

Page

1. カラスシジミ ついに 堕ちる - - - 松井正人 (1)
2. ムモンアカシジミを飼育して - - - 松田俊郎 (1)
3. 飼 育 結 果 報 告 - - - 金子二久 (3)
4. ムモンアカシジミ飼育記録 - - - 松井正人 (3)
5. ゼフむだ話(6)ムモンアカ悲喜こもごも - - - 野中 勝 (4)
6. S e l f i n t r o d u c t i o n - - - 澤田 博 (7)
7. 短 報 2 - - - (8)
8. 訂 正 と お わ び - - - 野中 勝 (8)
9. 会 員 の 動 き ・ し ゃ ば の 動 き - - - 編 集 部 (9)
10. 例 会 の 記 録 - - - 編 集 部 (10)

カラスシジミついに墮ちる

松 井 正 人

石川県のカラスシジミの記録は甚だ少なく、1958年の2例(*1)しか知られていず、最近の採卵技術の向上から採卵調査による記録の追加が望まれていた。ところが、食樹はあまり目につかず、また大木にもなるのでなかなか手がつけられなかった。

しかし、ついに以下の如く本種を採卵したので報告する。

吉野谷村中宮途中谷	1985年9月15日	23卵	オヒョウ
尾口村三又発電所	1985年9月15日	6卵	オヒョウ

卵は日当たりの良い溪畔の樹の、空間へ良く張り出した枝先から多く得られた。またほとんどが1個で、小指位の太さより枝先の方へかけて、枝の分岐部、小枝の下(葉痕)、シワ(芽鱗痕)、ワレメ、アナ等に見られた。

(*1) 武藤 明(1960) 石川県の蝶(Ⅱ) とっくりばち 9 p.4-6
白山 1958年8月5日 1ex 加戸・高村君採
白山(別当出合) 1958年8月17日 1ex 川瀬英夫君採

ムモンアカシジミを飼育して

松 田 俊 郎

昭和59年9月30日(日)石川郡白峰村大杉谷にて、ムモンアカシジミを採卵した。これは既に“翔”に報告した通りである。このうち私の手許にあった9卵について、その後どうなったか報告する。9卵のうち4月中に4卵がフ化した。1令幼虫はばかに大きく実に良く歩き回る幼虫で、何か蛾の幼虫のような気がした。フ化した時、アブラムシがいなかったので(怠慢にも餌を用意していなかった。) TSUIISOに書いてあった方法を思い出し、カルピスと蜂蜜をやってみた。もち論植物食(ミズナラ)も入れておいた。しかし、数日後4匹の幼虫のうち2匹が死んでしまった。どうもこの方法では残りの2匹もすぐに死んでしまうような気がしたので、アブラムシをやることを考えた。

家の近くでアブラムシを捜してみたが見つからないので、わざわざ白峰村百合谷までアブラムシを採りに出かけた。4月の下旬のことである。百合谷林道で、吸水にきていたスギタニルリシジミを何頭かネットしたことを覚えている。さて、百合谷のムモンアカ生息地では、確かにアブラムシはいることはいるのだが、その数は大変少ないように思った。そこで大杉谷まで足を伸ばして、アブラムシを採ってきた。大杉谷でもアブラムシの数は少なかった。(後で分かったのだが、アブラムシはまだ繁殖期に入っていなかったのだ。) この大杉谷で採ってきたアブラムシとミズナラを、タッパーの中に入れてしばらく様子を見

ることにした。(このアブラムシは、図鑑等で調べてみて、クリオオアブラムシであることが分かった。) それから2、3日たって、タッパーの中をのぞいてみると、幼虫がアブラムシを食べているのではないか。私は虫メガネを持ってきて、その様子をしばらく眺めていた。幼虫の口の動きとアブラムシの動きとは完全に一致し、バリバリとアブラムシを食べる音が聞こえてきそうな気がした。(令数を記録していなかったのは残念だが、どうも2令であったような気がする。) さて、普通であればこれで一安心という訳なのだが、安心するにはまだ早すぎた。餌となるアブラムシは、大杉谷で採ってきた位ではすぐになくなってしまったからである。また、大杉谷まで行く元気は無かった。しかし、せっかくここまできたのに殺してしまうのは惜しかったので、もう一度近辺でアブラムシを捜してみることにした。

その気になって捜してみると、アブラムシは案外簡単にみつかった。どうも、ポツンと離れたクリの木を目当てに捜せば良いようである。見つけたのは、石川郡辰口町湯屋というところであった。(ここは、後に松井氏に教えてもらったウラナミアカシジミの産地だった。) この時、クリオオアブラムシという名前のついた訳がようやくわかった。このアブラムシは、無数といえる位たく



さんいて、オオアブラムシと呼ぶにふさわしい大きな大きなアブラムシもたくさんいたのである。これで餌の心配は無くなった。ミズナラにも食痕があり、飼育は順調に進み、私は成功間違いなしと思っていたのだが・・・

それからしばらくして、ムモンアカシジミの幼虫は2匹とも死亡した。原因は良く分からない。この時期、私はフジミドリシジミ等の飼育に追われ、ムモンアカシジミは飼育方法が面倒なので、どうしても後回しになりがちであった。しかし、このことが原因とはどうも思えない。何か他に原因があるような気がする。実際のところは、良く分からないのだが・・・

以上が私のムモンアカ飼育記録である。参考までに幼虫の写真を載せておきます。

飼育結果報告

金子 二 久

- 1) 昭和60年3月10日、井村、中西、松井、金子により能登島で採集された10頭のコムラサキ幼虫を預かり飼育した。越冬場所より移動したもの：4頭。成虫になったもの：3頭(1♂2♀)。全部クロコムラサキ型であった。
- 2) 昭和59年9月30日、中西、野中により白峰村大杉谷で採集されたムモンアカシジミの卵20を預かり飼育した。フ化したもの：9個。羽化したもの：1頭(♂)尚、同日同地で♀成虫が採集され飼育していたが、同年10月23日死亡した。その間全く産卵しなかった。開腹してみたが卵は見つからなかった。
文末ではあるが、文中の諸氏に深謝する。

ムモンアカシジミ飼育記録

松 井 正 人

1985年白峰村大杉谷にてムモンアカシジミの幼虫を採集し、自然状態に近い様にと土を入れたケージにて飼育を試みた。結果は土を入れた事によってケージ内の掃除が思うに任せず、カビをよぶ原因となってしまった。また大量にアブラムシを投入したことによって、共に植え込んだミズナラをすぐに枯らしてしまった。今思えば密閉式の大型タッパーを利用した方が良かったと思われる。それでは下記に、不備な記録ではあるがその飼育の様子を示すことにする。

- 5月12日 ミズナラのスベスベしたエンピツ位の枝より、ムモンアカシジミの2令幼虫5 exs を採集する。
ケージ(30×30×20cm)に土を約4 cm入れ、小さなミズナラ3本を植え、同時に採集したアリ、アブラムシ、カイガラムシと共にいれる。
- 5月某日 アブラムシは2、3日で死滅してしまったので、庭の柳に付いていた灰色のアブラムシを次々に追加する。アブラムシは食っているか不明だが、コナラ、ミズナラの葉は食っている。
- 6月某日 2 exs の幼虫がアリの巢中に潜りこんでいる。
- 6月某日 ケージ内は全く掃除しないので汚れが目立つ。その為か、幼虫がポロ、ポロ、と死んでゆく。
- 6月某日 残り3 exs となり、2 exs は再びアリの巢中に潜っている。
- 6月25日 残り2 exs となる。
- 7月3日 1 ex前蛹、残り1 exはアリの巢中に潜ったか不明。
- 7月5日 1 ex蛹化。
- 7月22日 1♂羽化。
- 7月31日 残り1 ex以前不明。

松田俊郎氏の石川県のムモンアカの再発見という何度いってもいい足りない快挙(1)のおかげで、昨年から今年にかけて本種の全ステージを野外で観察、採集し、飼育羽化に挑戦する機会が得られた。以下に試行錯誤の過程の一端を紹介したい。

★(1)成虫編 既に松井正人氏が報告している1984年8月11日の、発見者の案内までついた二番煎じ大会(2)にはもちろん筆者も参加し、2♂2♀を採集させてもらった。この際、病床で動けぬ中西重雄氏の代わりに、氏の祈りの込められた新品の8m竿が参加、活躍したことと、筆者の採集品のうち1♂1♀は中西氏の病床に届けられ、寝返りもうてず天井を向いたままであったにもかかわらず中西氏はこれを展翅してしまったことを付記しておく。何はともあれ、石川県のムモンアカが採れた。喜。

★(2)卵 編 同年9月30日、発生木が判っている以上、極めて容易と予想された採卵に、松田、中西、金子二久の各氏と共に出かけた。白峰村大杉谷の発生木に着いてみれば、心配していたアリの活動はまだ盛んで、木に登ってアリの通路を探したらアッという間に卵は見つかってしまった。それにしてもでかい卵である。3本の発生木(総てミズナラ)を調べた結果、卵は根元近くから、径2~3cmの枝まで、アリが歩いている所ならどこにでもポツポツと産んであることが判明した。あまり産卵位置に癖は無く、また卵を隠す習性も無い様で、これみよがしに産んであった。ただ、採卵するなら枝の分岐部や、上部で横に張り出した枝の上面(アリは一般に横枝では上面を歩く?)がポイントとして探し易そうであった。この日は適当に切り上げてその後フジミドリの採卵に向かったが、それでも収穫は4人で約60卵。喜。

どうせ他の人々は殺してしまうに決まっていると、そのうち約20卵を僕が飼育することにした。飼育は難しそうだから半分は死ぬとしてもピカピカのムモンアカ10匹は悪くないな等と甘い幻想を抱いて春を向かえたが、他のゼフ卵のフ化が総て終了しても、ムモンアカの幼虫は一頭だにフ化して来なかった。頭にきて卵を片端からナイフで切り開いてみたところ、約半数は完全なカラッポ。残りの大部分には緑白色のベチョベチョのものが詰まっており、寄生蜂の幼虫か蛹だろうか? わずかに2~3卵からゼフの幼虫の干からびたのが出てきた。越冬は冷蔵庫中で他のゼフ卵とまとめて行い、他種のフ化率は特に悪かった訳でも無いのに何故ムモンアカだけ干からびたのだろうか? とにかく幼虫が出てきてくれなくては飼育の秘術も発揮する術なし。悲。

★(3)幼虫編 長野県開田高原、1985年5月5日昼下がり。とても信じられないところからムシをほじくり出してくる鬼の中西氏、成虫の採りっこでは不敗を誇る悪魔の勝海雅夫氏を相手に回して、睡眠不足の眼をこすりこすり戦ったチャマダラセセリの決闘も陽がかげって幕。時間はまだ早いし、それでは以前、井村氏とムモンアカの成虫を採集した場所が近いからと、フ化しなかった大杉

谷の卵の穴うめ採卵を企てた。行ってみれば確かにコナラの木にアリがゾロゾロと登っていた。しかしこの木は下枝をつけないでスーッと伸びており、木登りを得意とせず、あまつさえ寝不足の上にチャマ決闘で疲労した身であれば手も足も出せなかった。がっかりしていると「去年僕も見ているから、そこへ行ってみますか？」と悪魔のささやき。それが天使の声に聞こえて早速駆けつけてみれば、今度は下枝豊富な初心者向けミズナラにアリが登っていた。枝を2段ほど登って主幹の分岐部を見れば、「あったー」、またもやいとも簡単に卵発見。ムモンアカの採卵は始めてという悪魔が「見せて、見せて」と登ってくる間にも付近からどんどん卵は見つかった。中にはフ化殻も混じっていた。樹皮がめくれ上がって、アリの通路がその裏側を通っているところを何気無くめくってみると、何やら集合していた様子のアリがパッと散って中からやけに細長いイモムシが出現。先程のフ化殻と結び付いて、これがムモンアカの初令幼虫と分かるまでにはしばらくの時間が必要であった。それ程この幼虫は、細長く、背中に模様まで付け、おまけに素早く歩き回り、とてもゼフの初令幼虫とは思えない代物であった。ムモンアカの幼虫と分かればあとは採集するのみ、鬼と悪魔に手伝ってもらって10頭ほど発見した。ついでに餌もと、付いているはずのアブラムシを捜したが見つからなかった。又、ミズナラの芽もほとんどふくらんでおらず、幼虫がいずれも太い幹から発見され、アリが集まっていたことと合わせて、鬼は「初令幼虫はアリに給餌されている」という仮説を提出した。興味ある問題である。この幼虫の完べきな飼育記録を記すと以下の如くなる。「餌にはミズナラの新葉と庭のブナについたカイガラムシを与えた。ミズナラが食べられたことは確認したが、カイガラムシが餌になったかどうかは知らない。幼虫は何度か脱皮し、やがて4匹



図-1 ムモンアカシジミ
(1985年6月27日羽化♂)
肢の毛に注目！

が蛹になった。途中で死んだものの原因は不明であるが、何と無く摂食意欲を失って干からびたという印象をうけた。6月25日～6月30日に3♂1♀が羽化した。」夢にまでみた毛むくじゃらのムモンアカの写真を図-1に示す。喜。

この間6月9日、6月23日に鬼と一緒に松井氏によって発見された白峰村百合谷のポイントを採卵目的に訪れた。ここはほぼ平らで足場の良い所に約10本の発生木であるミズナラ(卵殻にて確認、未フ化卵が極めて多かった。)が生えており、ゴマンと幼虫が採れそうな環境であった。が、実際は0。木の上から根元の落葉の裏までアリが歩いている所は何処でも捜してみたにもかかわらずである。ものの本(3)にも幼虫後期には発生木から姿を消すと書いてあるが、一体何処に行ってしまうのだろうか？ 悲。

★(4) 蛹 編 百合谷の幼虫採集に敗退してから、蛹もどうせダメだろうという気になってしまった。誰も蛹には挑戦さえしていない様子であったし、僕も捜す気は無かった。以下の様な次第で、たまたま発生木に行き着いてしまうことがなければ・・・・。

7月21日、5歳になる息子を連れて、ヒメオオクワガタを採ろうと白山の釈迦道へ出かけた。ところが、別当出合の手前で起きた崖崩れの為、市ノ瀬に車止めのチェーンをはって、お回りさんが番をしていた。僕は別当出合方面には用はないし、「石川むしの会の者ですが、昆虫の分布調査で釈迦道に入りたいので通して下さい」と頼んでみたが、頭の固いお回りさんは全く相手にしてくれなかった(もっともムシカゴをかかえた子供を連れて分布調査もないか?)。やむ無く、もしかしたらゲートが開いているかもと大杉谷林道をつめてみたが、こちらもしっかり鍵がかかっていてダメ。フテクサレてブラブラと戻ってくればムモンアカを採卵した発生木。ヤケクソで車を止めてたたいてみたが、やはり早すぎる様で飛び出すものは無く、それならば蛹をと根元に屈み込んだ。百合谷とはかなり様子が違った。百合谷は下は平らで、辺り一面アリがはいまわっていたのに対して、こちらは急斜面でアリは一系列に根元の巣(?)へ入って行く。巣(?)と書いたが、樹の根元に土を塗りとくって処所に穴を空けた様なものでむしろ通路と言うべきか。実際にアリの列はこの部分の下から更に下方に向かって続いていたが、この部分を崩した際、中から多数のアリと共に羽アリが出てきたのでここでは一応巣としておく。

この巣をワリバシ(なんでこんなものをもっているかって？ 訳は知る人ぞ知る)で崩すと、「出たー」、間違いなくムモンアカの蛹。調子に乗ってどんどん崩し、結局ここから4蛹を得た。蛹は土に軽く糸で付着している様子であったが定かで無い。とにかく落葉などには付着しておらず、まる裸でポロッと出てきた。採蛹位置を図-2に示す。ものの本(4)に

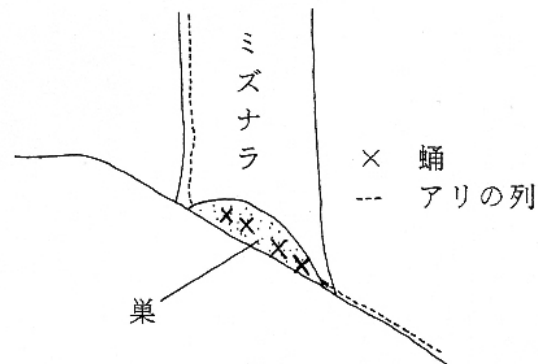


図-2 ムモンアカシジミ蛹発見場所

よれば、完全な蛹がアリの巢中から発見された例は無いとなっているが、今後観察例がふえれば各地で確認されるのではないかと思う。次ぎの木に行くと今度は巢中では無く、樹幹とそれにもたれ掛かっている岩とのすき間のやはりアリの通路の枯葉裏、ドングリのハカマの中から3蛹が見つかった。喜。蛹なら飼育の心配も無く、労せずしてピカピカの成虫が得られるはずであったが、何とまともに羽化したのは、7月29日の1♂のみ。他の4exsは羽化したものの羽が伸びきらず、2exsは蛹のまま腐ってしまった。採集時に蛹をいじったのが悪かったのか、急激な温度変化が悪かったか。悲。

★(5)再び成虫編 8月2日成虫採集に。既に成虫が得られたとの情報が数人の人から入っていた。百合谷1♂1♀(新鮮)、大杉谷2♂(ややボロ)。飼育品より明らかに大きいのが、僕はやはり小さくても飼育したものの方にひかれる。今度機会があったら、更なる秘術を尽くして、野外産より大きな飼育品に挑戦してみたい。その時、待っているのは悲か喜か。

今思えば、ムモンアカとめいっばい遊ばせてもらった一年だった。これは松田俊郎氏はもちろん、多くの採集行に同行された中西重雄氏(鬼)、開田高原の発生木を御教示下さった勝海雅夫氏(悪魔)、百合谷の発生地を発見された松井正人氏、飼育情報を交換して下さった金子二久氏、文献を貸与下さった吉村久貴氏ら多くの人々に負う所が多い。ここに記して感謝したい。

文 献

- (1) 松田俊郎(1984) 翔 48 p.1
- (2) 松井正人(1984) 翔 48 p.3
- (3) 佐藤周二、山内博尚(1982) ちょうちょう 5(2) p.3
- (4) 福田晴夫 他(1984) 原色日本蝶類生態図鑑(Ⅲ) p.101

Self introduction

澤 田 博

自 宅 画920 金沢市石引1丁目16番11号 電 0762-61-5701

血液型 B型 昭和25年生まれ 金沢市役所勤務

10年程休眠していましたが、昨年よりボチボチ活動を開始しました。以前はカミキリを主体に採っていましたが、今は多くのことに興味があります。

★オナガシジミの記録★

オナガシジミは近年、蝶談会メンバーの採卵活動によって急速に分布が明らかになってきていますが、成虫の採集記録が少ないようなので、既産地ですが報告しておきます。

金沢市寺津 20.VII.1985 lex

午後4時頃、木から木へ飛翔し葉上に静止した所を採集。なお、新鮮な個体です。

★ ムモンアカシジミ

1985年 8月18日	尾口村深瀬手取ダム湖畔	1ex目撃	吉村貴己
1985年 9月1日	尾口村白山楽々新道	1ex目撃	中西重雄

0

訂 正 と お わ び

野 中 勝

0

翔49号の筆者の「ゼフむだ話(4)採集禁止」に対し、最近発刊された AMICA 通信NO.5の中で、富山県昆虫同好会の大野 豊、水野 透両氏は激しい調子の反論を発表され、特に筆者が「富山県の虫屋さんは、アサマシジミを天然記念物に指定しようとしている」と書いた事に対して、事実無根であるとされている。富山県の方々がそう言われる以上、これは筆者の先入観に基づく誤解であった様で、この点に関しては訂正し、いわれもなく富山県の虫屋さんを非難してしまったことをここに陳謝し、お許しを乞いたい。

その他の点についても両氏から多くの御批判を賜ったが、それらは残念ながら理論的というよりは感情的な部分が多く、“翔”の紙面を費やしての論争にはなじまないと判断したので、ここではこれ以上触れない。興味のある方は、大野氏より恵与された AMICA通信が筆者の所にあるので直接御覧頂きたい。ただし、一点だけここで明確にしておきたい問題がある。それは両氏が「世間の眼」、「社会人としての節度」を虫屋としての行動基準の第一のものと考えられているらしい点である。その事自体はどうという事はないが、問題は両氏が筆者にも「同じ様にしなさい」と要求されている点にある。自然に対する好奇心、虫に対する情熱を最も大切なものと考え、趣味でやっていることであるとはいえ、無責任な世間の風潮に流されたり、マスコミに迎合したりする様なまねだけはするまいと決心している筆者にとっては、これはとても受け入れ難い要求である。大野氏が「自分で納得出来ないことであっても、(一般からの)批判は受け止めていかねばならない。」と書かれているのを読むと、これは一体どう解釈したら良いのかと迷ってしまう。筆者の考えはもちろん、「自分で納得出来ない批判にたいしては、徹底的に反論しなければならない。」である。

幸い、今の所石川県には天然記念物に指定された蝶はなく、筆者は石川県在住の虫屋の一人としてこのことを誇りに思っている。しかし前にも書いた様に、ギフチョウを天然記念物にといったバカなことを考える人もいるから油断は出来ない。その様な動きが具体化すれば、筆者は徹底的に反対する覚悟であるが、会員諸氏はいかがお考えだろうか？

0

0

会員の動き・しゃぼの動き

★7月某日吉村貴己氏、夏休に帰沢するも、連日某コンサルタントにてアルバイトに余念が無い。白山の道無き所へ入り込んでいるもよう。今後発表のバイト採集記が楽しみである。

★8月4日丸石谷ゴマポイントは、ひさびさに賑ったらしい。ところがゴマシジミに御目通りがかなったのは金子氏だけとか。

★8月4日松井氏ゴマの調査に中ノ川へ。ところが二日酔のため、オロロ渦巻く恐怖の世界をたださまよっただけらしい。

★8月4日嵯峨井氏、愛児丈弥君とムモンポイントを駆け巡る。百合谷のデコボコ道に愛車カーナが泣き通しだったらしい。

★8月9日木曾への採集行に発つはずだった嵯峨井氏、カゼでダウン。前夜の予習が原因とか。家族中から恨まれたらしい。

★8月10日蝶談会第1回カラオケ採集会を尾口村ブナオ山観覧舎にて開催。金沢市内は犀川祭りでごった返し打ち上げ花火が鳴り響く中、尾口村のブナ林には静かにカラオケが鳴り響いた。採集品はノコメ、ナマリ、各1頭とシャチホコ少々でヨコヤマヒゲナガはカラオケが苦手らしい。参歌者は、野中、井村、松井、中西一家5人、高平一家5人の13人。

★8月11日中西氏、猛暑の中でフジ2卵

を採集。かげろう揺らぐ真夏の炎天下、土場に捨てられた枯枝より採卵、よくもまあこんなことが思い付くことよ。

★8月11日金子氏、富山県有峰湖畔にてナイター。フシキ、ワモン、ヨシノ、ゴマシオ、オニベニ、エゾシロ等採集。

★8月12日金子氏富山県大日平へ。なんでも牛首まで登った所で雨に降られ立山駅まで戻った所、晴れてきたのでまた登り直したらしい。大日平には小雨の中、ベニヒカゲが乱れ翔んでいたという。

★情報通のK氏によれば、福井の木村富至氏、尾口村尾口発電所付近にてヒメシジミ4exsを採集したもよう。また福井にも若手虫屋の会がこの12月にも発足するらしい。

★8月14・15日高平氏、家族サービスを兼ねて長野県へ。予定は美ヶ原、霧ヶ峰と聞いていたが、なぜか菅平、野尻湖周辺を徘徊した模様。収穫は？

★8月16日沢田氏、奥池より奥三方岳へ。ねらいはノリウツギ。はたして何が採れたか！

★8月16日田辺氏、奥能登へ撮影行。門前ではクロコムラがネコヤナギの上を舞い、富来にはジャコウアゲハがいなかったらしい。”とにかく暑いうえにすばしっこくて、写真どころではなかった”らしい。

★8月16～18日2人のN氏”白山タカ

ネヒカゲ採集する”の情報を得、急きょ白山へ。はたしてタカネヒカゲはいかに？ 乞御期待。

★8月17日金子氏、またもやナイター。今度は丸石谷の奥らしい。獲物は、ナマリ1♂、その他カトカラ少々らしい。□□パワーのすさまじさかな。まけてはいられませんな。

★8月18日松井氏と吉村兄弟、ムモンアカの新産地を目差して尾口村深瀬へ。現着時に新車がパンク、なぜかタイヤ交換に2時間もかかったらしい。新車で出かける時はくれぐれもご用心。

★8月18・19日井村氏、愛車コルディアターボを駆って富士山から南アルプス広河原へと大採集旅行。獲物はパキタ、ゼブラ、ヒメヨツスジ。

★8月24日N氏I氏の仲良しO型コンビは岩間でナイター。カミキリはさっぱりだったらしいがオニクワガタが1ペア採れ、なかよく分けたとさ。めでたしめでたし。

★8月25日山中町にヤンバルテナゴコガネ現る！ 松井氏ホシチャバネの調査に鶴ヶ滝へでかけ、ヤンバルテナゴコガネTシャツの竹谷氏に出会ったらしい。このTシャツ、TTSで900円とか。

★8月25日野村氏、安宅海岸へ。最近はおっぱら海への採集らしい。この日も大量のカキに大満足。

★8月29日松田氏、キベリを求めて釈迦岳へ。例によって車は市の瀬でストップ。しっかり徒歩で登る。釈迦道には

アサギマダラが乱舞し、ピーク付近にはベニ、クモベニもいたらしい。

★8月31日M氏I氏の屈強O型コンビ丸石谷にてナイター。不思議な事に獲物はフジ2卵。なんでも月がとっても青かったとか。

★9月8日松井氏、白山楽々新道にて、カムリC群と樹上の決闘。喚くやら木をゆするやら。しかしなぜか？

★新刊書籍案内

日本の昆虫②クロシジミ 蛭川憲男著
クロシジミに関する他方面の知見が収録されている。まぼろしのイシカワクロシジミを探し出すには必携の書ですぞ。定価1300円。

例会の記録

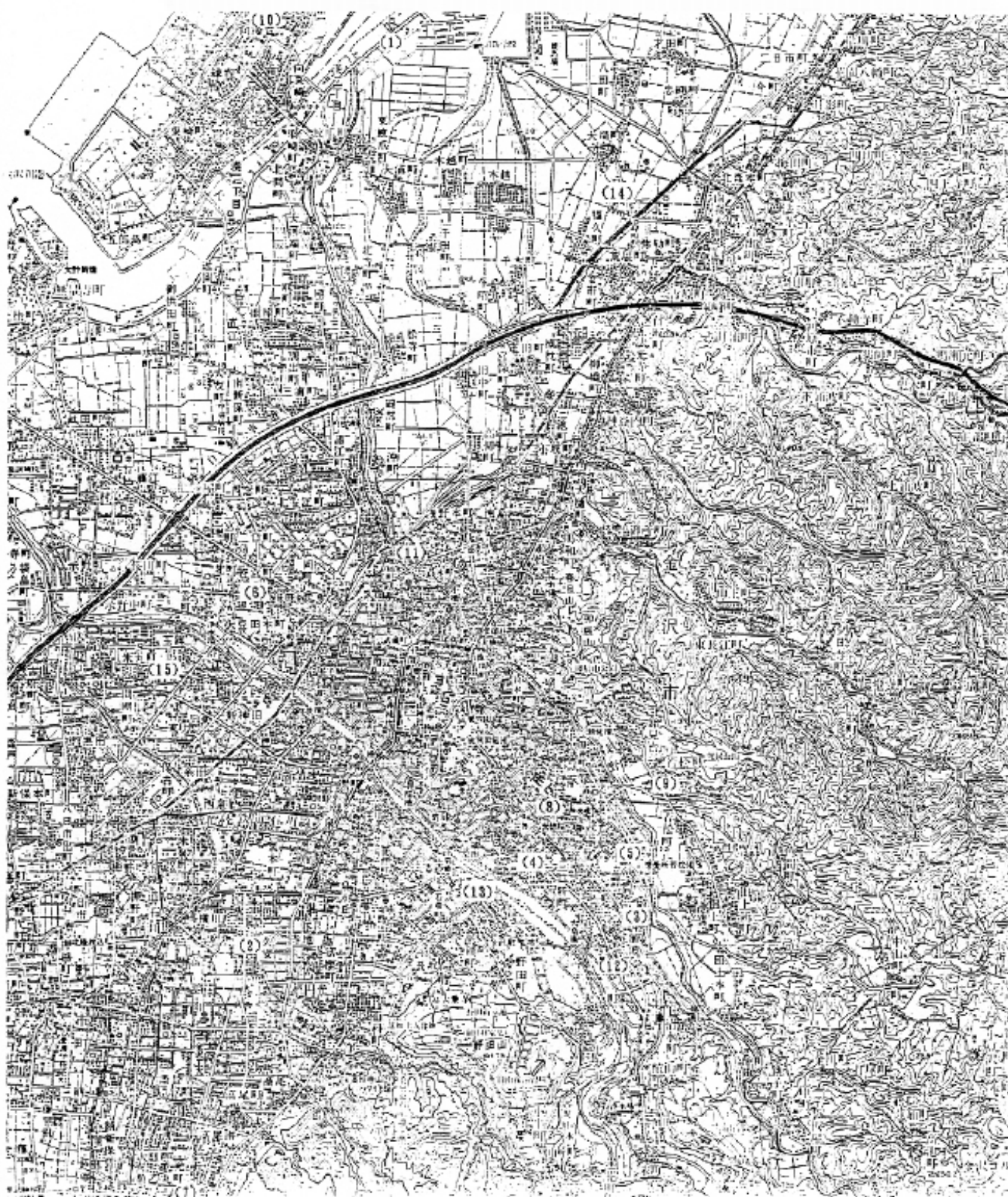
★8月2日(金)大桑町城南管工にて。出席者は井村、勝海、金子、近藤、沢田、高平、田辺、中川、中西夫妻、野中、松井、松田。

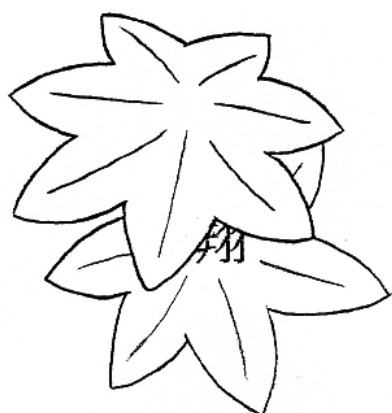
翔52号の配布と印刷製本の話。コピー製本には多大な時間労力がかかり、これからの発行増をふまえて、印刷製本にすればの意見がでたが、予算増につながる為今回見送り。翔の発行態勢を崩さずさらに安価な印刷製本法を調査することとなった。

地方同好会と会誌交換を行い、地方の情勢、会誌のあり方等探る事となった。まずは6団体へ願状を出した。

その年最も活躍した会員2人に賞が送られることとなった。その名も”Mr. Ms.蝶談会”副賞として標本箱、ムシピンが送られる。該当者は今年から12月例会によって選ばれる。会員諸兄今がチャンスだ、標本箱をねえ。

金沢市周辺会員分布図





と ぶ NO. 53 1985年 10月 11日 (金) 発 行

発 行 金沢市大場町東871の15 松井正人方 百万石蝶談会

編集・校正 松 井 正 人